

ニッセイアセットマネジメント株式会社

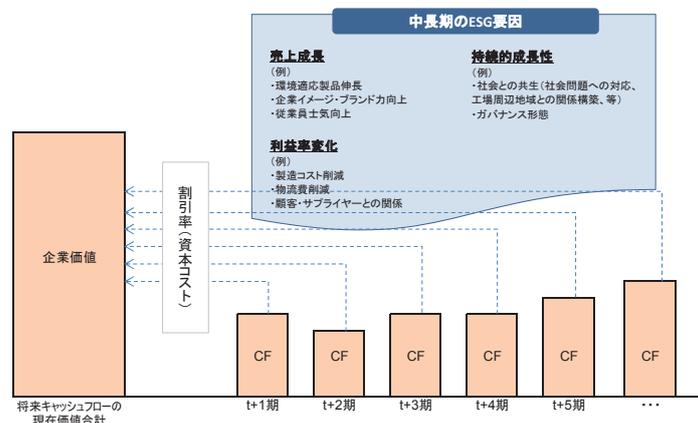
セクターアナリスト一人ひとりがESG分析も担当

ニッセイアセットマネジメント株式会社(ニッセイAM)は、運用資産額約13兆円を有するアセットマネジメント会社である。同社は、2006年には国連責任投資原則(PRI)に署名し、2007年にはグローバルな機関投資家団体である国際コーポレートガバナンス・ネットワーク(ICGN)にも加盟するなど、比較的早期の段階からESGを巡るグローバルな知見や動向に注目してきた。2014年5月には日本版スチュワードシップ・コードに対して、また、2017年5月にはその改訂版に対して、受け入れを表明している

気候変動問題やSDGsに対する企業対応が進む中、ニッセイAMではESG評価を通じて投資先企業の持続的成長力(サステナビリティ)を把握することの重要性が一層高まると考え、ESGの取組みを推進している。同社が掲げる「ESG取組み方針」には4つの柱がある。第一に、長期的な投資のリスク・リターン向上の観点から、運用資産の投資価値に及ぼすESGの課題とその影響の把握・理解に努めること(ESG課題の認識)。第二に、受託者責任の観点から、ESG課題を運用プロセスにおいて考慮することに努めること(運用プロセスにおけるESG考慮)。第三に、ESGの要素を考慮した商品を開発・運用し、投資を通じて持続可能な社会の実現に貢献したいという投資家のニーズに応えること(ESGを考慮した商品の開発)。第四に、コーポレートガバナンスの向上をはじめとしたESG課題、および長期的な企業価値向上の観点から、企業との対話や適切な議決権行使に努めること(企業との対話)である。

具体的な取組みとしては、投資先企業の持続的成長力(サステナビリティ)を把握するための軸として、独自のESG評価を運用プロセスに組み込み、中長期の業績予想の確信度を向上させるよう努めている。E(環境)の具体的な評価視点は、TCFDで焦点があたる気候変動問題をはじめとする環境問題への取組みと企業価値毀損の防止・向上へのつながりである。社会(S)は、ステークホルダー(従業員・顧客・取引先等)との関係と企業価値向上へのつながり。ガバナンス(G)では、ガバナンスの仕組み、体制等と企業価値向上へのつながりである。これらについて、同社では、適宜(少なくとも年1回)調査対象企業を再評価するなど、適切なモニタリングを行う仕組みを構築している。

ニッセイAMは、ESGを組み込んだ運用プロセスを進化させるため、2016年3月に新たに「ESG推進室」を設置した。ESG推進室では、ESGの調査をグローバルで行うとともに、運用担当者向けにESGリサーチ会議を開催し、ESGの知識の共有化・深化を図っている。また、ESG分析において、外部のESG評価会社を活用するアセットマネジメント会社が少なくないと考えられるが、同社はESG評価を原則として自社で行っている。その際、財務分析を担当するセクターアナリストとESG評価専門のアナリストを分けず、セクターアナリスト一人ひとりが企業価値分析の一環としてESG課題も分析するという体制をとっている。このように、アナリスト一人ひとりが企業とそれを取り巻くESGの状況を個別に把握し、独自の評価の枠組みに基づいて自社で評価することで、よりESG要素をインテグレートした投資判断の実施に取り組んでいる。



ESG要因の企業価値評価への反映イメージ 出所：ニッセイアセットマネジメント